

自分たちでやりきることを大切にした支援について

— 中学年生活科「たんじょうび会のおやつをつくろう」の実践から —

中 田 美 緒

1 はじめに

児童の学校や家庭での生活の中で、大人の助けを借りることなく、自分、あるいは自分たち（自分と友だち）でやりきったと思える場面を、彼らはどれだけでも持っているだろう。障害の有無にかかわらず支援は教育において常に在るが、本学級の児童の場合、その内容が直接的であったり、頻度が高かったりしやすく、冒頭のような思いを味わえるチャンスは比較的少ないのではないかと懸念する。自分（たち）の力でやりきれたという手応えが、大きな達成感をもたらし、それが自信を生み、次の課題に挑戦してみようという意欲につながるという図式は、彼らの中でも言うまでもなく成立しており、そうした経験を一つひとつ積み重ねていくことで、精神的な自立が促され、将来の生活的自立の可能性が高まっていくものと考えられる。

そのような思いに立ち進めてきた学習活動の中でも、本稿では調理活動を取り上げ、児童が「やりきった」と思えるための支援のあり方について考えていきたい。

2 実践事例「たんじょうび会のおやつをつくろう」

(1) 単元について

調理活動は、五感に直観的に働きかけながら見通す力を育てることができることや、生活力に直結していくことから、積極的に機会を設けている単元であり、児童たちの興味・関心も高い。

本単元では、クラスメイトの誕生日を祝うというねらいに向かって自分たちの力で作り上げたという達成感が味わえるように、できるだけ自分たちだけでできる活動を多く取り入れた課題を設定して、取り組んだ。

指導にあたっては、個々の仕事の内容と量を確保しつつ、かつ児童間にかかわりが生まれるように、二人で小グループを構成して行う活動を基本とし、指導者は極力直接的介入を控えるように努めた。活動の過程で生じる問題などを自分たちで考えて解決できるように間接的支援を行うことで、自分（たち）でできたという達成感を味わい、ひいてはそれが自立への自信へと、つながっていくことを期待している。

(2) 児童の実態について

(表1)

| 児 | 選択についての実態 | 集団へのかかわり | 必要な支援 |
|--------|---------------------------|--------------------------------------|-------------------------------------|
| ⑦ ⑩ | 過去の経験から、見通しのもちやすい方を選んでいる。 | 集団での活動の仕方がわかり、自己主張しながら友だちとかかわって活動する。 | 過去の類似の体験をイメージすることができる具体的な手がかりを提示する。 |
| ⑧ | 過去の経験から、見通しのもちやすい方を選んでいる。 | 集団での活動の仕方がわかり、友だちとかかわって活動する。 | 過去の類似の体験をイメージすることができる具体的な手がかりを提示する。 |
| ⑨ | 友だちや指導者の活動への関心から選んでいる。 | 指導者の言葉かけや、友だちの動きを手がかりに活動する。 | 児童が特に好んでいる活動の中での選択場面を設定する。 |

本学級が作成した表（p142参照）により、本単元実施時の指導の実態を捉えると、（表2、……）のようになり、それをまとめたものが前ページの（表1）である。

（表2）

| 〈選択についての実態〉 | 〈 支 援 〉 | 〈集団へのかかわり〉 |
|--------------------------------|---|--|
| 友だちや指導者の活動への関心から選んでいる。 | ⑨ ・ 児童が特に好んでいる活動の中での選択場面を設定する。 | ⑨ 友だちの動きを手がかりに活動する。 |
| 友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。 | ⑧ 過去の類似の体験をイメージすることができる。 | ⑧ 集団での活動の仕方がわかり自己主張しながら友だちとかかわって活動する。 |
| 過去の経験から見通しのもちやすい方を選んでいる。 | ⑦ 具体的な手がかりを提示する。 | ⑦ 集団での活動の仕方がわかり自分と友だちの考えを比較し調整を図りながらかかわって活動する。 |
| 自分にとって乗り越えなければならない課題の有無で選んでいる。 | ⑩ 児童が課題と捉えていることについて課題達成までの見通しをもつことができるような具体的な手がかりを提示する。 | ⑩ 集団での活動の仕方がわかり自分と友だちの考えを比較し調整を図りながらかかわって活動する。 |

（表2）を見るとわかるように、⑦、⑧、⑩の児童ははばをもちながらも一応1つの段階の中に位置しており、⑨の児童が一人その前のところにいる。実態と生活年齢の2つの要素を考慮し、⑨と⑩、⑦と⑧の児童を組にすることで、自分に必要な力を互いに相手から得ながら、自分たちの力で活動をすすめていくことをねらえると考えた。例えば、次の段階との境界あたりにいる⑩の児童が⑨の児童とかかわることで、相手の行動を常に気遣いながら自分の取るべき行動を考える場面が生まれ、自分にとって好都合な選択ばかりはしてられない局面に遭遇する経験の中で、自己主張を中心とした行動から一歩抜け出て、相手の気持ちを考えながら自分の行動を選択する力をつけていくことができる、というようにである。

（3）指導目標について

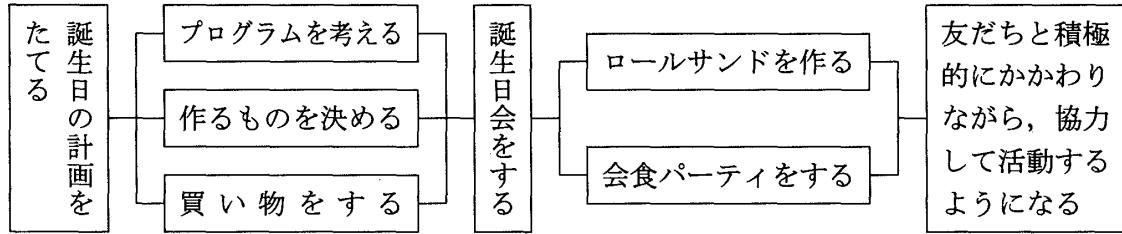
- 友だちの誕生日のために自分たちで作ろうという気持ちがもてるようにする。
- 材料、道具、レシピを見て考えながら、ペアで協力して活動できるようにする。

上の2点を4人共通の指導目標に設定して、取り組んだ。「仲良しのクラスメイトの〇〇君の誕生日のために作る」という動機は児童にとって明確なものであり、「自分たちで作る上げる」という方向付けを行うのに無理のないものであったように思う。

(4) 指導内容と計画について

第一次（2時間）

第二次（1時間）



① 第一次での取り組みについて

第一次では、誕生日の計画を立て、必要な準備を行った。それまでの誕生日会では、主役がリクエストした食べ物を作って食べることイコール誕生日会であったが、今回はそれに「お祝い」の意識を強められるようにパーティの形を整えることで、より明確に目的意識をもちながら調理活動を行えるようにした。（ともすれば、調理が始まると、そのことそのものが目的となってしまうがちだったため、他の調理活動と変わりなくなるという印象があったため。）

② 第二次での取り組みについて

第二次では、立てた計画に沿って調理をし、出来たお菓子を囲んでパーティを行った。ロールサンドを作るのは10月に続いて2回目なので、どちらのペアも指導者に頼ることはほとんどなく必要な物を用意し、レシピを参考に2人でかかわりをもちながら作り上げていった。その後で、主役意外の児童の司会によるパーティという運びとなった。

(5) 第二次第1時の授業について ～仮説～

以上のように、主体的に活動できるための動機が明確にもてるような場の設定の中で、活動の内容や手順にしっかり見通しをもちながら、自分たちでやりきったと思えるような活動を行うための取り組みにおいて、次のような仮説を立てた。

| | |
|----|--|
| 仮説 | 誕生日会の意義と作り方の手順を確認して本時の活動に入るならば、児童は協力して自分たちの力でロールサンドを作ろうという気持ちをもって取り組むであろう。 |
|----|--|

(6) 目標行動について

上の仮説を実証するために、児童1人ひとりに対して第二次第1時における目標行動を以下の表のように設定した。児童⑦についてはペアの児童の動きにも目を向けかかわりをもちながら活動できること、児童⑧については、困ったときに教師に手助けを求めるのではなく友だちや自立的な手段に向かえること、児童⑨については、次の活動がわからなくなったときにも切れることなく、友だちやカードを手がかりに次ぎに進もうという行動がとれること、児童⑩については児童⑨や全体を見つつ、必要な行動がとれるといったリーダー的力をねらうことにした。

| 目標行動 | 教師の支援 | 児童 |
|--|---|----|
| 周囲を見ながら自分の取るべき行動を考慮することができる。 | 自分の活動を決める時、特にペアの友だちの行動に目を向けたり気持ちを考えてりするよう促す。 | ⑦ |
| 準備物や友だちの行動から手順を理解し自発的に活動することができる。 | 次の活動に戸惑っているときにはレシピや友だちの行動に目を向けるよう促す。 | ⑧ |
| 準備物や友だちの行動から次の活動を理解し、集中を持続させて活動することができる。 | 次の活動に移れないときにはレシピや友だちの行動に目を向けるように促す。ペアの児童からも本児への働きかけを引き出す。 | ⑨ |
| 全体の動きを見ながら、友だちに必要な援助や言葉かけができる。 | 自分の活動を決めていくにあたり、周囲や、ペアの友だちの様子に目を向けるよう促す。 | ⑩ |

(7) 学習の展開について

| 学 習 活 動 | 予想される活動 | 教 師 の 働 き かけ | |
|--|---|--|---|
| | | 全 体 | 個 別 |
| 1. はじめのあいさつをする 2. 前時に振り返りをし、本時の活動内容を知る 3. ロールサンドを作る 必要な物を準備する 手順を考えて調理する 4. 誕生日会をする 誕生者を祝う 選択・会食をする 5. おわりのあいさつをする | 2. ・思い出して話ができるであろう。(児⑦⑧⑩) ・具体物を用いて間に答えられるであろう。(児⑨) 3. ・自分の使う物だけ用意しようとすると思われる。(児⑦⑧⑩) ・準備に積極的に参加することが難しいと思われる。(児⑨) ・手順カードを積極的に利用して作ろうとするだろう。(児⑦⑧⑩) ・すぐに活動に移ることが難しいと思われる。(児⑨) 4. ・司会に不慣れなため進行上戸惑うことがあると思われる。(児⑧⑨⑩) | 1. ・学習のはじまりとして毎時間位置づける。 2. ・前方に集中できるように児童の座席位置に配慮する。 ◎誕生者のためにみんなで作ることを確認する。 3. ・2ペアの活動場所を明確に提示し混乱しないように配慮する。 ・個々の実態に応じた手順カードを提示する。 ◎ペアの協力が引き出せるような働きかけを行う。 ・先に出来た方のテーブルを誕生会用に準備するよう、働きかける。 | 1. ・当番児童にあいさつするよう言葉かけする。 2. ・児⑨の気持ちが途切れないように必要に応じてT ₂ がそばで言葉かけ等を行う。 3. ◎グループ単位で、使うものを用意するように促す。(児⑦⑧⑨) ◎児⑩から児⑨に準備の協力を促すように働きかける。 ◎どの段階の作業か、カード上で分かりやすく提示する(児⑨) ◎活動上困ることがあればペアの友だちと相談するよう促す。(児⑧) ◎ペアの友だちを援助している児童の行動をすぐに評価し、協力的なかかわりを支援する。(児⑦⑩) 4. ・養高児童の様子を思い出させたり、プログラムの利用について指導したりして会の進行を援助する。(児⑧⑨⑩) |

3 考察

(1) 間接的な(介入度の低い)支援のあり方について

本クラスの児童にとって、例えば、わからないことを周囲の人に自分から尋ねることができるといった力は将来の自立に向けてとても大切なものであり、日頃から意識的に働きかけていっている部分でもある。しかし、はじめにでも述べたように、本当の意味での自立に向かうには、そういったスキルの獲得と同時あるいはそれ以前に、自立したいという欲求と、それを支える精神的な自信が不可欠ではないかと考える。それらを、子どもの中に芽生えさせ確立するために必要なものとは何だろう。

様々なスキルの獲得手順として、こちらの提示したことを理解し、それを見通しとして持って、何度か繰り返すことで身につけていくということを常とする彼らの日常には、常に身近に大人がいて、それとの一問一答式のやりとりの中で活動が進んでいくことが比較的多い。そうではなく、自分たちで考え計画し、それを大人の手を借りないでやりきれた、という思いを経験して欲しい。そのための支援とは…。

ア 自分たちですべてを計画することは困難でも、自己選択、自己決定の場面をふんだんに設け、「自分で考えて決めた。」という思いがもてるように支援する。

イ 計画を実行に移していく中で、児童が見通しを失って大人に助けを求めなくてはならなくなるような事態が多く起こらないように、必要な情報を予め提示したり、用意させたりしておく。(失敗体験ではなく、先ずは成功体験を積み重ねるために)

ウ 対大人ではなく、友だち同士で関わり合いながら相手を援助したり、相手の行動を手がかりにしたりしながら活動していくことができるような、場の設定や言葉かけを徹底して行い、評価の時間までは大人は陰の存在となる。

今回の実践では、このような発想を終始一貫徹底し、児童は一つの成功体験を味わうことができたと思う。「生活」、「総合的な学習の時間」など、こうした内容を盛り込みやすい場面における不断な実践を通して、更に考えを深め、検証を進めていくことが必要だと考える。

(2) 実践以降の児童の変容について

1月の本学級の児童の実態を捉えると、(表2、=)のように変容していることがわかった。児童⑦は、強い自己主張の時期が続いていたが、そのピークを越えて、少しずつ友だちの気持ちにも目が向きかけている様子が見える。児童⑧は、自我の弱さから、集団の中で自己主張できないでいる状態から、だんだん「〇〇したいよ。」「△△してもいいですか?」と言える場面が増えてきた。児童⑨は、かなり近い位置で指導者が行動調整をする必要があったのが、今では、友だちの動きを手がかりに動いたり、模倣したり、注意を受け入れたりする行動が増えている。児童⑩は、のびのびと自分を表現するところそのままに、他者への目配りが自然に定着してきており、集団へのかかわり方が、明らかに次の段階に入ったことをうかがわせてくれる。子ども同士の豊かなかかわりを通して、一人一人が自分の次のステージに向かって進んでいけるようにと願う。

4 おわりに

今年度は、対象児が3、4年生であるということや、子どもの実態に鑑みて、大人の手を離れてやりきる成功体験の積み重ねに重点を置いて取り組んだ。これについての試みもまだまだ途中で、更に深めていく必要があるが、一方で、もう少し上の学年や、違う実態の集団においては、自立して行う活動の中に少し高いハードルを設け、それをどうやって乗り越えさせていくかということが次なる課題となってくる。それをも越える力を身につけたとき、自立が手の届くところまでやってくるのだろう。その双方を視野に入れながら、今後も「自立への欲求と自信の確立」における有効な指導について考えていきたい。